

3.4.4 所蔵資料のデジタルアーカイブ化と公開

ADEAC^[2]は、デジタルアーカイブを検索・閲覧するためのクラウド型プラットフォームとして、東京大学資料編纂所社会連携研究部門との産学連携の研究成果に基づき2012年に会社組織として設立されました。全国各地の歴史資料や文献テキストおよび画像を自治体や美術館・博物館等の組織から依頼を受けて記録しデジタル資料化しており、利用者はADEACのウェブサイトから自治体や美術館・博物館等の資料（絵画・写真、立体物、地図、古典籍、文書・記録、図書、書簡、映像、新聞・雑誌等）を横断検索することができます（図3.9）。



図3.9 ADEAC ウェブページ [2]

3.4.5 デジタルアーカイブと連携した児童サービス

松川村図書館は、2009年に「児童サービスを中心に据える」^[3]という理念のもとに出発しています。安曇野ちひろ美術館とMLA連携（図書館、文書館、博物館、美術館等の協力体制）して開館当時から運営されてきました。長野県では、「信州ナレッジスクエア」という、信州に関わるさまざまな地域情報資源のポータルサイトを運営しています。そのなかのサービスの一つ「eReading Books」（図3.10）で、松川村教育委員会が『わたしたちの松川村』（図3.11）を身近な地域を学ぶデジタル教材として公開しています。



図 3.10 eReading Books [4]



図 3.11 わたしたちの松川村[5]

以下に松川村図書館長棟田氏へのインタビューを掲載します。松川村のコンテンツが「eReading 信州学」に公開された経緯をお聞きしたものです。「村の教育委員会が小学生向けの郷土学習用副読本を作成するのにあたりまして、成果物を印刷冊子体ではなくウェブ上で公開したいけれど、そのスキルがないとの相談を受けました。以前より私は信州ナレッジスクエア

の「eReading Books」の存在を認識しておりましたので、これは良い機会だと考えました。そこで村教育委員会、副読本作成業者、eReadingコンテンツ作成事業者、県立長野図書館担当者との四者による会議を設定し、公開に向けて動き始めました。」

ここで重要なのは、サービスの仕組みづくりにおいて、それぞれの立場の担当者による綿密な打ち合わせがあったということです。連携と協働が重要だと言えます。

3.4.6 学校図書館のデジタルアーカイブ発信と活用

聖学院中学・高等学校では、図書館を「文化遭遇たまたまばこ」と名付け、さまざまな取り組みを行っています（図3.12）。

取り組みの一環として、図書館トップページのバナーに「デジタルアーカイブス」とボタンを表示し、学校の記録に外部からもアクセスすることが可能になっています⁹⁾。これは、1906年（明治39年）の創立以来の史料を随時デジタルアーカイブ化して公開しているものです。司書教諭の大川功氏は「在校生、卒業生、教職員、また、将来本校に関わるすべての者に、建学の精神と本校教育活動の歴史を視覚的遺産として残すことを目的として始めた取り組みであった。しかし、次第にコンテンツ自体が反響を呼び始め、「未来と過去、人と人をつなげる媒介」に成長していった」と述べておられます。このアーカイブは在校生の平和教育に、また、外部から研究のために活用されています。

このような取り組みにより、聖学院中学・高等学校図書館の貸し出し冊数は取り組み前の3倍に増えているとのこと。